社説

黨閥情實の弊を禦ぐ可し

凡そ政府の官吏は適任の才を擧げて得意の伎倆を逞うせしむるを肝要にして或は政治の要は此一點に存すと云ふも差支なきが如し然るに今日の實際は往々然らず人物の取捨多くは俗に云ふ義理人情に因て決するの有様にして必ずしも才力の如何を問ふに遑なきのみならず甚しきは時に人の爲めに官を與へ公を藉りて私を成すの形跡を見る可し之を名けて政界の情實と云ふ抑も今の政府に此情弊を生じたる次第を尋ぬるに維新の元勳等が政府を組織したる當時、藩閥藩の人物を擧げて功勞に酬ゆるに官職を以てしたるより苟も多少の經歴あり又は當局者に關係あるものは續々政府に入て地位を占め二流三流相踵で遂に動かす可らざるの勢を成したるものなり而して其所謂功勞とは必ずしも新政府の事業に直接の關係なく實は當時銘々が其藩に盡したる忠勤にして云はゞ一種の私功なるに然るに事成るの後に至りて此私の功勞に酬ゆるに國家の官職を以てす謂れなきの甚だしきなれども如何せん事實斯くの如くにして爾來因襲の久しきます〳〵藩閥情實の纏綿を致してます〳〵政治上の累を成し立憲政の今日に至りても内部の折合甚だ六ケしく一方には時勢の必要に迫られ一方には適任の人物あるを認めながら尚ほ情實を引云々して局に當らしむるを得ず爲めに内閣の破綻を起すが如き如何にも見苦しき次第なりと云ふの外なし然りと雖も以上は從前の別問題として扨又つら〳〵政界の將來を案ずるに政府と議會との關係ます〳〵切なるに從ひ政府が政黨の力に頼らざる可らざるは明々白々の成行にして現に前内閣の如き自由黨と提携の實を成したる次第なれば今後政黨の勢力に消長ある毎に甲黨乙派互に政府と提携して其都度首領を政府に立たしむるの事實を見るは疑を容る可らず然るに今の政黨の實際を如何と云ふに主義綱領と稱するものは簡單至極内情は極めて粗雜にして秩序の統一なく其間自から種々の關係事情を存する其有様は政府内の情實に比して格別の相違もなきが如し左れば其首領が一旦政府に入るに當り重なる黨員を引入れて事を助けしむるは實際の必要なれども或は種々の關係よりして人物の如何に拘はらず單に平昔の功勞に酬ゆるが爲め官職を與ふるみともあらば多々ます〳〵際限なくして結局多數の黨員を引入るゝの止むを得ざるに至る可し果して然らば情實政府の弊漸く減ぜんとするに際し更らに又一種の情實を生ずるものにして我輩の飽までも拒絶する處なり蓋し政黨の勢力次第に加はるに從ひ政治上の形勢次第に變化するは自然の勢なれども其基礎未だ鞏固ならずして社會の信用も厚からざるに早く既に政黨内閣の形を試みんとして實際に黨閥情實の端を開くが如きは政黨自から毀つものにして將來の發達に非常の妨なきを得ず我輩は今の時節に際して豫め其弊を防ぐの必要を認むるものなり

○勅令

昨日の官報を以て左の二勅令を發布せらる

朕千住製絨所長特別任用令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治二十九年九月二日　内閣總理大臣陸軍大臣副署

勅令第二百九十七號

千住製絨所長特別任用令

千住製絨所長ハ文官任用令ノ規定ニ依ラス陸軍監督及豫備役後備役陸軍監督又ハ技師ノ中ヨリ文官高等試驗委員ノ銓衡ヲ經テ之ニ任用スルコトヲ得

朕文部省直轄諸學校官制及職員定員中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治二十九年九月二日　内閣總理大臣文部大臣副署

勅令第二百九十八號

明治二十六年勅令第八十六號文部省直轄諸學校官制第一條第二項中山口高等學校ノ下「及鹿兒島高等中學造士館」ノ十一字ヲ削除ス

同年勅令第八十七號文部省直轄諸學校職員定員第一條中鹿兒島高等中學造士館ノ部ヲ削除ス

○辭令

●●●免本官(九月二日)　臺中縣支廳長　松村雄之進

●●●位記返上致スヘシ(九月二日)　從七位勳六等　松村雄之進

免兼職并補佐世保鎭守府造船部造船科主幹(九月二日)　横須賀鎭守府造船部造船科主幹兼技手横須賀造船所教官海軍造船少技士　白井親吉

補東京地方裁判所判事(九月一日)　判事　松岡義正

福岡縣下馬匹共進會審査長トシテ同縣下ヘ出張ヲ命ス(九月一日)　農商務技師　西川勝藏

大阪鐵道株式會社并南和鐵道株式會社鐵道線路ヘ出張ヲ命ス(九月一日)　遞信技師　工藤謙

○土匪討伐の報告

去月二十日發にて臺灣總督府より陸軍省へ昨日達したる土匪討伐の報告は左の如し

宜蘭守備隊長よりの電報に粗抗(四堵と煉仔寮の間)に土匪百六十名集合し砲二門を有すと依て花崎大尉は二小隊を率ゐ昨十九日朝三時宜蘭を發し頭圍よりは一小隊を午前七時に賊の占據地煉仔寮に達せしむる筈水返脚守備隊長よりの電報に曰く昨日午後零時錫口守備隊長は土人より土匪二名入込たるの密告を受け直に捕獲に着手せしに二名の内一名は舟にて河を渡りて逃ぐ他の一名は河中に入り右岸に着きたる頃之を射殺せり

窟尺庄外の雙溪口、張厝後の茶山に於て老幼男女十八人日に茶葉の採摘に從事せしが十六日の早晨に於て突然蕃人數十人該處に來り男女九名を殺害したり外一名の婦女は幸に逃回する事を得しと

査するに該處に在ては蕃人時に出沒し事端を滋生すると又聞く無數の土匪蕃地に入り込み蕃人に事を生ぜしめんと教唆しつゝありと

○臺灣雜信

八月十五日　在臺中　茂木生

第一　臺北管下の景況

八月一日第一旅團は佐本少佐に屬する基隆、頂双溪、頭圍、宜蘭の各守備隊より一箇中隊を出し宜蘭の新店間生蕃界に潛匿する土匪の掃蕩に從事せり此附近には頃日土匪出沒して我憲兵隊屢通譯(土人)を捕獲せしとの通報あり

第二　臺中管下の景況

今橋中佐の討伐以來賊徒深く山谷の間に潛伏し我軍殆んど足跡を通ずる能はず唯各所に優勢の兵を備へて時機の至るを待つのみなりしに八月二日雲林附近の殘賊林杞埔を襲撃し守備隊は直ちに之を擊退せしも其時上等兵二名兵卒一名負傷す

第三　臺南管下の景況

中部臺灣土匪蜂起の影響は澎湖將軍の麾下にも及びたりと見え八月四日午前十一時頃東港に在りし我憲兵八名が竹仔脚附近を偵察中八十餘名の土匪より突然射撃を受く憲兵は奮つて防戰する事一時間なりしも衆寡の勢遂に敵する能はず漸く血路を開いて石光見に退却す此報に接するや枋寮よりは一小隊の憲兵を派遣して竹仔脚を包圍し賊魁の一人陳某を捕ふ然るに其時彼れ火藥に火を點じたれば其破裂の爲めに我兵十一名負傷す賊は東港の東方約三里に當る南盥安に退却す

目下賊徒の勢力愈々増加し來る勢なるを以て討伐の爲め八月五日の夜鳳山より一箇中隊を該地方に派遣せり

第四　志波參謀の消息

七月十六日釜山丸は基隆守備一箇小隊を搭載して花蓮港に至り志波參謀并に降兵百五十餘名を載せ十八日基隆に歸還せり同日釜山丸は更に大和の護衛を以て支那本土に向ひ降兵を悉く清國ハイタン島に放逐し萬事故障なく其始末を終り大和艦は澎湖島に、釜山丸は基隆港に歸航す

第五　臺東の情報

臺東地方は劉德杓の敗滅後は一般平穩にして土人悉く歸順少しも不穩の事なし唯守備隊は戰役後病兵頗る多く一箇中隊の健康者僅かに二十名に過ぎず而して其健康者とても一二日のマラリヤ熱に苦しみたる病人なり降兵二百七十餘名の内百二十名は臺東地方に資産を有し順良の者なるを以て同地方に住居するを許し殘餘百五十餘名を淸國に放逐す卑南花蓮間の交通は甚だ不便なり

第六　草賊に關する諜報

査聞するに四方に潛伏して我軍の動靜を窺ひ居る草賊は舊七月某日を期して再び各所に蜂起し臺南一帶の者は鹽水港地方に臺中一帶の者は鹹菜甕に集合し以て我軍を襲はんとす而して目下四方に連絡を通じ密りに檄文を發して秘密運動最中なりと

宜蘭の福祿黨西皮黨の者數十八人目下臺北城内外に散在し晝は肩に物を擔ひ夜は刺客と爲つて潛行する由其取調べの結果彼等の申立つる所なりと云ふを聞くに現在土匪諸處に散在し未だ大事を爲す能はざるは是皆各衙門の副通譯等の爲めに官署に密報せられ(未だ副通譯の功を聞かず此諜報は副通譯の手より出でたるものならんか)萬事發露して功を奏せず故に先づ刺客をして暗に雞毛箭(頭は雞毛にして矢尻に毒を附着したるもの)を以て副通譯を倒さしめんとし斯くは刺客夜中に潛行すと傳ふ

第七　步兵八聯隊第八中隊

土地公桑山頭に於ての突貫を以て賊徒を擊破し松居討伐隊中稀有の戰功を奏したる步兵第八聯隊第八中隊は七月廿二日埔里社を出發して臺中に歸還し其後續て臺中守備に任ぜられありしが今回松居討伐隊の臺中に歸るを待て苗栗に在る中村大隊に復歸する事に決定せり

第八　田村旅團長の訓諭

八月十四日田村少將は各隊へ左の如く訓諭せり

訓諭

頃日外國新報の記事を閲するに在臺灣南部日本軍隊の所爲頗る慘虐を極め蠻行を逞うするとの旨を以て非難攻擊殆んど其極點に達せりと云ふ而して其彼等の所謂慘虐蠻行と稱する者を列擧するに即ち

一無辜の良民を虐待する事

一土人の家屋を燒失する事

一婦女を辱しむる事

一土人の墳墓を汚瀆する事

一田畑を損害する事

一家屋に濫入し物品

一土人を虐使する事

以上の所爲果して我軍

の名譽を汚損し其威信

可きは吾人皆熟知する

斯る暴戻なる所爲なき

蓋し右の非難攻擊なる

くは浮説詭傳より來り

尤は在臺灣軍隊の所爲

恰も諸外國人の環視の

極微の瑕瑾も膨大にし

萬國の問題に登るに至

抑も討伐に際し戰鬪

固より公論の許す所な

土人の家屋に放火し武

て之を殺戮するが如き

他所謂慘虐蠻行なる者

に涵養せられ殊に將校

さゞる可きは既に前號

夫の如き教育なく德義

せし如き蠻行及び鷄賊

る等の暴行なしと斷言

夫に至る迄監視注意を

ん事を期すべし

右訓諭す

無辜の良民を虐待し田

夷するが如き行爲は未

る所而して我軍隊は

粹の者なく好で墳墓を

に是等の評判は安平港

手に依て發表せられし

頓首する事情を遠から

○荷車客車を衝く

も非常の暴風にて家屋

害ありしが同夜基隆停

のため自動を起し獅山

に吹き荒み後より車輛

力を得て獅子嶺迅の勢

せし時分は非常の速力

びしのみ倶々獅山驛を

工夫は見れば向より

りしを喰止めんと線路

べき工夫はハタと和ね

摺切られたる上にも

斯るみそには

る一輛餘の

突し貨車は

け又下り汽車は汽關

知れたる貨車一輛にて

客に異狀なかりしは

事長は直に急使を

るや恰も同停車場には